

琉球大学学術リポジトリ

ヴィクトリア大学での日本語教育実習

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2010-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山城, 彰子, Yamashiro, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17611

ヴィクトリア大学での日本語教育実習

山城 彰子

1. はじめに

2008年2月から2008年10月までの約8ヶ月間、ニュージーランドの首都ウェリントンにあるヴィクトリア大学で日本語教育の実習生として活動した。ヴィクトリア大学で私が担当した授業や学生との関わりを中心に報告する。留学生の見学のガイドやチューターの経験はあったものの、琉球大学での私の専攻は琉球史であり、日本語教育については全くの初心者だった私のニュージーランドでの戸惑い、奮闘、感動などを伝えたいと思う。



ウェリントンの町並み

2. ヴィクトリア大学の日本語プログラム

2.1. 概要 (2008年度)

2008年度は、3人の専任講師と5人の非常勤講師（日本語教育実習生も含む）がおり、学生数は前期は約250人、後期は約200人であった。以下の表は2008年度に開講された授業の一覧である。

表1 2008年度授業一覧

100 Level Japanese Courses	
JAPA 111	Introduction to the Japanese Language
JAPA 112	Elementary Japanese
JAPA 104	Japanese Language 1
200 Level Japanese Courses	
JAPA 201	Japanese Language 2
JAPA 221	Readings in Japanese Culture and Society
300 Level Japanese Courses	
JAPA 301	Japanese Language 3A
JAPA 302	Japanese Language 3B
JAPA 311	Japanese Intellectual History

一覧表の科目のうち、JAPA111・112、JAPA104、JAPA201、JAPA301・302が通年の日本語の授業になっており、JAPA221、JAPA311は後期に開講された。私の専門は歴史なので個人的な興味から、学生に混じってJAPA311を受講させていただいた。JAPA311は古代から近代にかけての日本史を学び、使用するテキストも歴史学の講義用のもので学生たちは少々苦戦していたが、ニュージーランドという土地柄もあり異文化接触に強い関心を示す学生が多く、中には歴史学専攻の学生顔負けのレポートやスピーチを行う抜きんでた学生もいた。

2.2. 琉球・沖縄関連教育

JAPA301では『瑠璃の島』（2005）を教材としており、301の学生たちは沖縄への関心が高まっていた。そのためドラマのロケ地である鳩間島の自然の美しさや、沖縄の言葉について質問されることも多かった。またJAPA221では「うちなーぐち」について、JAPA311では琉球文化についての講義があったため、学生たちはいくつもの授業を横断的に受講しながら沖縄について知識を深めていた。

ヴィクトリア大学の日本語プログラムでは、全ての授業で使用する教科書に多かれ少なかれ、琉球・沖縄がトピックとして取り上げられている。しかし、どの教科書も「美しい海」に焦点を当てた沖縄のイメージに終始しており、琉球王国や沖縄戦、米軍統治に関しては皆無であった。帰国後、JAPA201の学生が沖縄に来てくれたが、彼は「美しい海」にももちろん感動していたが、米軍基地と基地周辺の町に大きな衝撃を受けていた。「旅行」、「日本の地理」、「長期休暇」など様々な角度からトピックとして繰り返し教科書に登場するならば、「美しい海」だけではない他の部分も伝えたいと感じた。そして、琉球史専攻の私がチューターとして教壇に立つ意義もそこにあるのではないかと考え、五月にはハーリー、慰霊の日前後には平和の礎、お盆にはエイサーなど、機会があれば少しでも紹介できるように努めた。

3. 日本語教育実習

3.1. 担当した授業

私が担当した授業は学部生のチュートリアルである。JAPA111・112、JAPA104のチュートリアルは、他のチューターと分担していたので、授業に差が出ないようにミーティングを重ね、特にJAPA104では楽しい授業になるようにアイデアを出し合い、毎週一緒に指導案を練るというとても刺激的な作業を経験させて

もらった。

チュートリアルの内容は、講義を担当している専任講師の先生と相談し、授業の内容以外に学生への対応の仕方や指導方法などたくさんのアドバイスをいただいた。

以下は、私が担当したチュートリアルの時間割である。

表2 2008年度前期(2月～5月)チュートリアル時間割

	月	火	水	木	金
10:00～10:50	JAPA201				
11:00～11:50	JAPA201				
12:00～12:50				JAPA301	JAPA111
13:10～14:00	JAPA201		JAPA104	JAPA301	JAPA111
14:10～15:00	JAPA201		JAPA104	JAPA301	JAPA111
15:10～16:00			JAPA104		JAPA111

表3 2008年度後期(7月～10月)チュートリアル時間割

	月	火	水	木	金
10:00～10:50	JAPA201				
11:00～11:50	JAPA201				
12:00～12:50				JAPA302	JAPA112
13:10～14:00	JAPA201		JAPA104	JAPA302	JAPA112
14:10～15:00	JAPA201		JAPA104	JAPA302	
15:10～16:00			JAPA104		

チュートリアルは5人から10人前後で構成された少人数クラスで、学生たちは好きな時間を選ぶことができ、仲がいい友達同士で受講していることもあるが、ほとんどの学生は初対面である。初めのうちは話しかけてもそんなに笑顔も見せてくれず、会話も弾まず、私が持っていた「英語圏の人々」のイメージとは随分違い、少し戸惑いもあった。しかし、同僚の先生から、「ニュージーランドの学校教育は少人数クラスが多く、シャイな子が多い」という話を伺い、授業内外で積極的に話しかけるように心がけ、ゆっくりゆっくり授業の雰囲気を作っていった。初めはぎこちない雰囲気だったクラスが徐々に温まっていき、後期には学生たちがとても仲の良いクラスメートになり、その結果授業への参加も積極的になったのでとても嬉しかった。

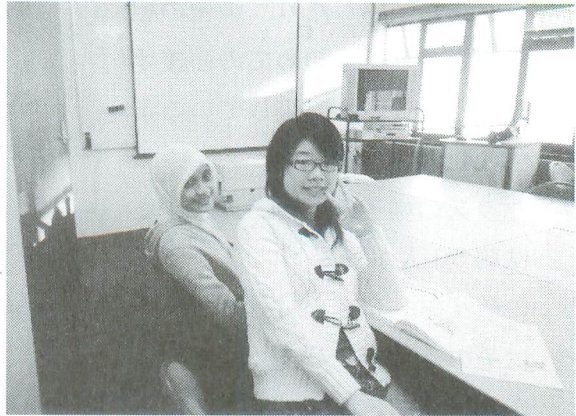
3. 1. 1. JAPA111・112チュートリアル

- ①対象：初級前半レベル
- ②教科書：『初級日本語げんき I』（The Japanese Times）
- ③チュートリアルの内容：講義のはじめに 10 分間の小テスト（漢字など）を行い、その間に講義の時間に出された宿題をチェックする。その後教科書の「読み書き編」に入った。「読み書き編」の文章を全員で音読し、内容を確認したのちにそれぞれのスピードで質問を解かせ、時間があれば関連する作文をさせた。日本語に初めて触れる学習者も多く、そのため他のコースに比べるとゲームが多い。
- ④クラスの様子等：JAPA111 は 8 クラスのチュートリアルに約 110 人の学生が登録、JAPA112 は 4 クラスのチュートリアルに約 50 人の学生が登録しており、日本語プログラムの中で最大人数のコースだった。そのためチュートリアルはもう一人のチューターの先生と分担していた。

チュートリアルは普通 10 人前後で進められるが、前期は最大で 20 人のクラスもあり、また英語を使わなければならないので一番緊張したチュートリアルの時間だった。事前に講義の先生とミーティングを行い、毎回用意されているテストと宿題のチェック範囲を伺い、また分担しているチューターの先生ともチュートリアルの進捗状況や授業案について話し合った。不安なことや困ったことがあったらその都度先生方に相談でき、とても助けられた。皆出席で授業にも積極的に参加するけれども成績がついてこない学生、日本語はもちろん、英語も母語ではないため積極的に授業に参加しにくい学生、とても努力しているけれども伸び悩んでいる学生。英語も不得意で、教壇に立つことも初めてだった私には JAPA111・112 は試練の連続で、その度に学生たちのフォローについて講義の先生と相談し、連携して学生たちと向き合えるというとても貴重な経験をさせていただいた。

日本語専攻を考えている学生、興味本位でちょっとかじってみようという学生、日本のマンガやゲームの日本語を理解したいという学生、学生たちの動機も様々で他のコースに比べるといろいろなキャラクターの学生たちがいたように思う。しかし、動機は様々でもみな一様に日本語初心者であり、日本文化にも初めて触れる学生たちはチュートリアルへの期待や「楽しい！」という気持ちを全身から発していて、とてもやりがいのあるチュートリアルだった。ちょうど、「こどもの日」に授業が重なったので、「こいのぼり」を用意し、「これは何だと思

いますか？」と質問したところ、それぞれ自文化に照らし合わせながら推測して口々にイメージしたものを言ってもらった。授業をまとめるのは大変だったけれども、日本語教育は学生たちが日本文化に触れる最大のきっかけでもあることを再認識した。また私自身が日本文化に対して持っているステレオタイプに幾度となく気付かされた。



JAPA112の1コマ

3. 1. 2. JAPA 104 チュートリアル

①対象：初級後半レベル

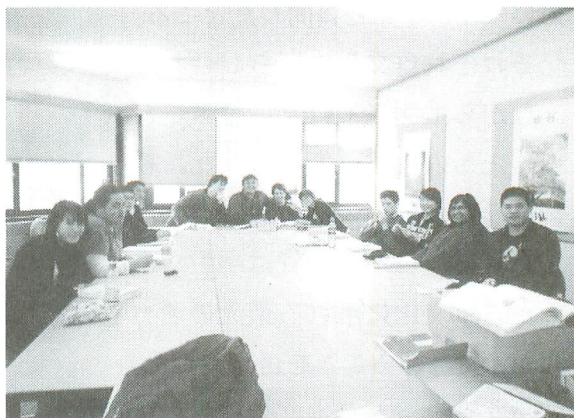
②教科書：『初級日本語げんきⅡ』（The Japan Times）、ヴィクトリア大学オリジナル教材

③チュートリアルの内容：前半の約15分はヴィクトリア大学のオリジナル教材を使って、学生たちはペアになって日本語でインタビューし合う。会話トピックは講義のトピックとも連動していて、講義で勉強した単語が使えるようになっている。トピックの内容は「休日」、「大学」、「私の夢」、「結婚」など、学生たちが興味を持ち、みんなで楽しく話せるようなものだった。ペアでインタビューが終わったあとに、そのインタビューの一部を発表してもらったり、私が質問をする形でクラスで共有した。質問内容はその人となりが見えるものが多かったため、クラスメートたちが仲良くなるきっかけにもなっていたのではないと思う。本当に笑いが絶えないチュートリアルのクラスだった。後半は教科書の「読み書き編」の文章を音読し、問題を解かせた。また後期に二回、尊敬語、謙譲語を使ったゲームがあり、少しとっつきにくい敬語表現が楽しく学べるように工夫されていた。

オーラルテストは専任講師の先生が行い、チューターはその記録を取る手伝いと採点に関わった。事前にオーラルテストの質問が配られているため、学生たちは想定問答集を作り、テスト前にチューターに正確な文章かどうかのチェ

ックをお願いしたり、練習の相手をしたりと、初めての面接オーラルテストに緊張している学生のサポートをした。

- ④クラスの様子等：JAPA104には約50人が登録し、5クラスのチュートリアルがあった。私はそのうちの3クラスを担当した。チュートリアルを分担したもう一人のチューターはヴィク



JAPA104の1コマ

トリア大学の日本語プログラムを修めたニュージーランド人（日本人とのハーフ）で、英語はもちろん日本語もネイティブ同様に話することができる方だった。毎週講義の先生とミーティングをする前日に、彼女と綿密なミーティングを行い指導案を作った。ニュージーランドと日本という二つの背景を持ち、彼女自身がヴィクトリア大学の日本語プログラムの出身者で、さらに教育活動に情熱を持っていたため、彼女とディスカッションを重ねて作り上げる授業は最も魅力あるチュートリアルになっていたのではないかと思う。教材研究を共に行い、情報を交換し、相談しあうという、とても刺激的な日々だった。受講生はJAPA111から日本語を勉強し始めた学生が数人、大半は高校から日本語を勉強している学生で構成される。高校から日本語を勉強している学生はJAPA104で勉強する文法事項のいくつかは学習済みであったり、修学旅行で日本へ数週間滞在したことがあるため日本文化をよく知っている学生が多く、余裕が感じられた。そんな中でJAPA111から始めた学生たちは自信をなくし、引っ込みがちになっている部分もあった。そんな学生へのフォローと、授業を引っ張ってってくれる学生、それぞれのいいところがバランスよく発揮できて参加しやすい授業を作るように心がけた。

JAPA104の学生たちはチュートリアルの時間が大好きで、他のレベルのチュートリアルに比べて出席率がとてもよく、積極的に授業に参加する学生たちだった。宿題を出しても全員がきちんとやってきて、「みんなで一緒に頑張ろう」という雰囲気の中で、私は何度も学生たちに助けられた。

3.1.3. JAPA 201チュートリアル

- ①対象：中級レベル
- ②教科書：『中級の日本語』（The Japan Times）
- ③チュートリアルの内容：講義で学んだ文法事項などの定着のために、教科書の「運用練習」のパートをチュートリアルで行った。ロールプレイが中心となっているが、前半は敬語・丁寧語



JAPA201の1コマ

を、後半はくださった表現を用いた会話文を自作したワークシートに書いてもらい、間違いがないかチェックし、発表してもらった。チュートリアルで行ったロールプレイが期末のオーラルテストに出題されるため、チュートリアル後に復習できるワークシートは自習に役立ったのではないだろうか。時間があれば、チュートリアル中に200字から400字程度の作文をさせ、翌週に添削し、コメントを付して返却した。時間が足りないときは宿題として、翌週に提出させた。また、JAPA201はビデオ鑑賞が約5時間ずつあり、前期はアニメ『セロ弾きのゴーシュ』（1982）、後期は『Shall We ダンス?』（1996）を前年度に引き続き教材として用いた。鑑賞後には短い感想文を書かせ、学生たちがどんなことを感じたのかを知ることができた。しかし感想文を見る限り、私の力不足でそれぞれの作品が持つ味わいを十分に伝えることができていなかったことが悔やまれる。それでも中には、宮沢賢治の思想や映画に描かれている日本人社会に強い興味を示す学生もいた。

- ④クラスの様子等：私は計4クラスを担当し、約40名の学生が登録していた。しかし学生たちは登録した時間外のチュートリアルに来ることも多く、授業の一体感を作ることはとても難しかった。初めは戸惑っていたが、200レベルは他の専攻と日本語専攻のどちらを主専攻とするのか悩んでいるという学生や、日本語は主専攻ではないという学生も多く見られた。そのため自由な雰囲気をお大切にしようと考え、学びたいという学生を最大限サポートできるように心がけた。また、200レベルを受講している学生たちは高校生の際に1年間日本へ留学していたという学生やJAPA111から日本語を始めたという学生など日本語能力

の幅は広く、できる限り学生一人ひとりに気配りし、それぞれのペースで進められるように気をつけた。

期末にはチューターも参加してオーラルテストが実施され、前期は①文章の音読（夢十夜）、②チューターに日本の学校生活について質問をする（給食、制服、受験などについて）、③チューターからニュージーランドの学校生活についての質問に答える（部活、専門、遊びなどについて）といった内容だった。後期は電話でオーラルテストを行うというとてもユニークなもので、①北野武（専任講師がその役を務める）に英語を教える家庭教師に応募する、②日本でお世話になったホストマザー（チューターがその役を務める）にお礼を言う、③講義やニュージーランドに関するいくつかの質問に答える、というものだった。設定がとてもユニークであることと、ちょうど北野監督の最新作が公開された時期とも重なり、学生たちは工夫を凝らした会話を展開し、とても楽しいオーラルテストになった。

3. 1. 4. JAPA301・302 チュートリアル

- ①対象：中上級レベル
- ②教科書：『文化中級日本語Ⅱ』、
ビクトリア大学オリジナルテキスト
- ③チュートリアルの内容：JAPA301・
302のチュートリアルは登録している
学生たちに5分間のスピーチと各

JAPA 301の学生のスピーチ

「日本のカフェ」、「日本の音楽」、「日本の祭り」、「ジャ「パン」」、「日本のファッション」、「宮崎アニメ」、「日本の風物詩」、「阪神淡路大震災」、「大船渡での留学経験」、「日本の神道」、「日本のいじめ問題」、「日本のビール文化」、「武士道」、「日本猿」、「日本のアイスホッケー」、「日本とニュージーランドのお酒文化」、「日本のテレビ番組」など。

学期にドラマテストが課されている。スピーチのテーマは自由に選ぶことができるが、ほとんどの学生は自分の日本経験や日本と関係があることを選んでいた。授業の初めの15分間はスピーチとディスカッションを行い、次に約15分間、ヴィクトリア大学オリジナルテキストの「会話練習」を行う。トピックは「デートに誘う」、「環境問題」、「日本の伝統文化」など、身近な話題からアカデミックな話題まで幅広いが、学生たちはどんなトピックでも自分の考えていることを日本語で論理的に説明することができた。

残りの20分間は教科書の聴解や作文を進めた。学生たちの作文はとてもユニークで、授業で共有するだけではもったいないと感じ、学期末に作文集を作り、JAPA301・302の学生たちとヴィクトリア大学の先生方に差し上げた。JAPA301・

302で日本語の学習を終える学生もいるため、大学で（学生の中には小学校、中学校から）日本語を学んだ成果を形として残す作文集は思い出になったのではないかと思う。

またJAPA301・302ではドラマテストが課されている。学生たちは3人から4人のグループを作り、8分～10分の寸劇の脚本を作る。ドラマテストはJAPA104, 201でも課されているため、学生たちは3回目ともなると慣れたもので、脚本だけでなく音楽を考えたり小道具を準備したりと演出にもこだわっていた。ドラマテストの数週間前から脚本の相談や日本語のチェックを行い、リハーサルを手伝ったりと、ドラマテストへの取り組みを見ることができたため、「日本語を使って表現する」ことを楽しむ学習者を手伝えることは私にとっても、とても楽しい時間になった。



JAPA301の1コマ

毎週、講義の先生とミーティングを行い、チュートリアルに進捗状況の確認や学生の様子などについて相談し、アドバイスをいただいた。

- ④クラスの様子等：JAPA301・302は約30名の学生が登録し、10人ずつのチュートリアルだったのでとてもバランスがいいチュートリアルだった。学生たちはチュートリアルでスピーチをする一週間前にチューターに原稿をチェックしてもらうことになっており、順調に進めば、①一週間前に原稿を預かり文法などをチェックし、②約1時間くらいミーティングを行って内容を確認し、③間違いなどを直して清書してきた後に原稿を読む練習を行い、パワーポイントで示す資料の相談をした。先ほども少し触れたが、スピーチの内容は日本文化に関することが多く、学生たちの視点から見た「日本」はとても興味深く、私の知らないことばかりで勉強になった。最高学年のため、日本語力は高く、チュートリアルは全て日本語で行った。2008年度のJAPA301の学生は他のコースに比べると人見知りの学生が多く、初めの一ヶ月は反応も薄くて、どういふうにチュートリアルを進めていけばいいのか戸惑った学年でもある。しかし、

ドラマテストの手伝いを通して距離を縮めることができ、また学生同士もドラマテストをきっかけに打ち解けられたようで、その後はチュートリアルに積極的に参加するようになった。初めの状況からは予想できないほど盛り上がり、指導案の進行に困るほどになった。

最後に、学生たちのスピーチの一部を紹介したいと思う。

「日本のギャル」

色々なギャル・タイプがあり、例えばガングロやマンバやバンバというんだ。

日本にいたときにとても変な経験があった。友達としもだにある海に行くと、友達がサーフィン・レッスンをした間に、私は日なたばっこをした。とにかく、二人ギャルは私の前に来て座った。彼らの髪の毛は金髪できれいな巻き毛のスタイルだった。日本人だからびっくりした。そして、すごい化粧品をした。その上にせの茶色をなめして、ほぼ黒だった。それで、眉（まゆ）をそって、描いて（えが）、明るい白アイシャドウと重い黒アイライナーを使った。サーカスの道化師っぽい（どうけし）と思って、私は雑誌（ざっし）だけにはギャルについて読んでいたから、あんなに近くて怖かった。それも、何で海で化粧品をしているのを考えた。だから、あんなギャルはうみの近くに行くと、慎重（しんちよう）に入って、頭をちゃんとひよいとひっこめなかった。せっかく、海で一番変な見たことだ。

「日本のスキー産業」

こんにちは皆さん。今日は日本のスキー場について話したいと思います。八十年代の時に日本のスキー産業が大ブームになりました。このブームによるとスキー場が数々出来ました。多くは本州のひださんみやくにあるんですが、沖縄以外、日本中どこにもスキー場があります。5年前、私が初めて北海道に行った時にスキー場の数で驚かされました。本当に小さな町でも、スキー場があった。田舎の町の小さい坂にリフト一台か二台があるスキー場が多くあったけれど、私は動いているのを見た事がありませんでした。しかし、現在ではブームの時に出来た小さいスキー場が潰れてしまったんです。でもまだ残っている経営しているスキー場は約六百ぐらいがあります。皆さんは日本のスキー場に行った事がありますか？

私はこんな良い経験が出来たおかげは、現在日本のスキー産業ではまた新しいスキーブームが起こっています。八十年代と違ってこのブームは外国のスキー産業により起こっています。とくに多いのはオーストラリア人です。なぜならオーストラリアでは雪は少ないし、北アメリカやヨーロッパに行くまでの距離や費用に比べて半分ぐらいだし、オーストラリア人が日本でスキー旅行やって来る人は非常に増えて来ました。

3.2. チュートリアル以外の時間

チューターに与えられた部屋で過ごすことが多く、授業の準備（パワーポイント資料の作成、導入の素材探し、指導案作りなど）をしていた。しかし、ひっきりなしに学生がやってきて、授業の質問に始まり、スピーチの相談、原稿のチェック、読む練習、それから漢字を書く練習、作文についての質問、さらに日本留学の相談

など学生と話している時間が圧倒的に多かった。また、ふらっとやってきては日本語とはあまり関係ない話や悩みを打ち明ける学生や、イベントのお誘いに来てくれたりと、教室では知ることのできない学生たちの内面や教室外の学生を知るきっかけにもなった。また、特に JAPA301・302 の学生たちは日本語の図書室にいることが多く、それぞれ日本語の授業の予習をしたり、課題に取り組んだり、助け合いながら楽しく勉強している様子がみられた。私も時間があるときはお邪魔して、学生たちの質問に答えたり、ニュージーランドのことを教えてもらったりととても楽しい時間だった。

特筆すべきことは、学生たちが授業外でも日本語で会話していることが多いということである。これは留学から帰ってきたばかりの学生たちが日本語を忘れたくないと意識的に日本語を使っていたことから始まったのだと思うが、他の学生たちも日本語を使うことが多くなっていた。さらに、英語がわからない私が会話の輪に加わると完璧に日本語だけの空間になる、という興味深いことに気づき、積極的に学生たちの輪に加わるように心がけた。そんなふうに大学にいる時間は「学生たちと日本語で話すこと」を第一に考えて過ごしていたため、チューターの仕事である、テスト・クイズの採点、スピーチ、ドラマ、提出物の評価などは専ら帰宅後にやることが多く、週末に集中して取り組んだ。

4. 教室内の設備

チュートリアル・ルームにはプロジェクターが設置されており、パワーポイントを使って授業を進めることができる。また、学生たちは日本のサブカルチャーやポップカルチャーに興味を持っており、授業が始まる前や休み時間にインターネットの動画配信サイトを使って、日本で流行っている曲を紹介したところ学生たちはとても喜んだ。やはり、映像と音楽はインパクトがあるため、授業の導入素材として効果的だろうと考え、それ以降よく使用した。チュートリアルの内容と関係がある映像を探して授業展開の合間に使ったり、JAPA302 の学生たちには歌詞の聞き取りをさせた。他にも、日本のテレビドラマの一部分を見せて、「お見合い」、「合コン」や「銭湯」、「病院」など想像しにくいシチュエーションを説明した。

5. おわりに

日本語学や日本語教育学を学んだことがない私がチューターという仕事をきちん

と務めることができるのか、最初はそんな不安ばかりで、日本語教育学の用語を覚えることに必死な毎日だった。また、日本語教育を学んだことがないチューターは私が初めてだということもヴィクトリア大学に着いてから知り、ますます緊張してしまった。そんなときにJAPA201の専任の先生に「日本語学や日本語教育が専門じゃない先生もいたほうが



JAPA104の1コマ

おもしろいじゃないか」と言われ、「そうだ、私らしく頑張ろう」と肩の力が抜けた気がする。クラスメートが仲良くなるように、授業が明るく楽しくなるように、そして何より学生たちが日本語、日本文化（琉球文化）をもっと好きになるように、教室内外関係なく全力でサポートしようと決め、走りきった8ヶ月間だった。日本語教師見習いとして教壇に立つ日々は、初めてのことで、わからないことばかりで、ヴィクトリア大学の先生方には本当に助けていただいた。先生方の学生一人ひとりに対する丁寧な指導、オリジナル教材の開発、授業運営など、間近で勉強させていただき、刺激的な毎日だった。

そして、一番助けられた存在は何と言っても学生たちである。学生たちはとても素直で、真面目にチュートリアルに取り組み、日本語がもっと上手になりたいと向上心溢れる学生たちだった。その学生たちの気持ちに応えようと一生懸命にチュートリアルの準備をして、試行錯誤の毎日だったけれども、不思議に疲れを感じたことは一度もなかった。町でも、大学でも、どこでも私と会うと、「先生お元気ですか。次のチュートリアルは何をするんですか。」と笑顔で話しかけてきてくれる学生たちは私のエネルギーだった。

印象深い思い出のひとつに、JAPA104のあるチュートリアルの学生たちがいる。私が担当したチュートリアルの中では内気な人が最も多いクラスで、前期は穏やかな雰囲気ですずかに進むチュートリアルだったが、後期に他のチュートリアルから移ってきた学生が仕掛け人となり、クラスメート全員で毎週私を驚かすことに苦心していた。チュートリアル・ルームのドアを開けると、全員が新聞紙で作ったかぶとを被っていたり、靴下で人形を作って机の上に置き学生たちは机の下に隠れていたり、

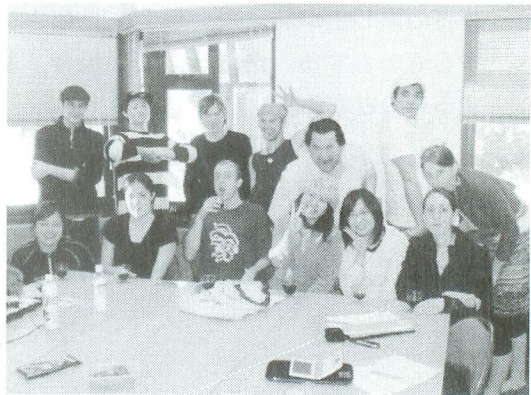
授業には直接関係はなかったけれども、学生たち自ら楽しい時間にしようとしていることがとても嬉しかった。

また、JAPA302のドラマテストで、突然ドラマにチューターを巻き込むという演出をしているグループが二つあり、事前に脚本もすべて見ているはずなのにも関わらず、私に気付かれないように周到に準備して計画を進めてきた学生たちにとっても驚いた。学生たちは思い思いにチュートリアルを楽しんでいたのではないかと思う。

JAPA302の学生たちは、大学での日本語学習を終え、それぞれの道を歩みだしている。3人はJETプログラムのALTとして既に日本で働いており、3人は日本へ留学中である。他にも、ウェリントンの和食レストランに就職した人、オークランドの日本人向けのおみやげ屋さんに就職した人など日本語が活かせる仕事についての学生もいる。日本語とはあまり関係がないけれども、弁護士や航空業界に勤めようと就職活動をしている学生や、まだヴィクトリア大学で日本語以外の専攻を勉強している学生も多い。

振り返ってみると、日本語教育の右も左もわからないまま、目の前にいる学生たちのためにと、がむしゃらに走りきった8ヶ月だった。大学にいる時間だけではなく公私共に支えてくださった光恵 Sandom 先生、このような素晴らしい機会を与えてくださったヴィクトリア大学の伊藤雄志先生と琉球大学の金城尚美先生、高良倉吉先生に感謝している。今後も琉球大学とヴィクトリア大学の交流がますます盛んになることを願っている。

蛇足だが、JETプログラムの説明会に行くためにJAPA302の学生たちがエレベーターに乗り込んだとき、何気なく「行ってらっしゃい」と声をかけたところ、学生たちがみんな笑顔で「行ってきます！」と返してくれた。日常の取るに足らない一コマかもしれないが、私が日本語教師としてニュージーランドで過ごした8ヶ月間の一番の報酬だと感じた瞬間だった。本当に、ヴィクトリア大学の学生たちに心の底から感謝している。



(人文社会科学研究所修士課程)

JAPA302の学生たち